

【ぼくいくつ】

気味のわるいおやじに逢いました。

縦から見ても横から見ても、【あまったれ】よりも。

「ぼくいくつ」

そうきいてくるのですが、はじめは何だかわからなかった。

「ぼくいくつ」

再びきかれると、何歳に見えるかと尋ねているのがわかりました。

「むむ」

ぼくは（たったいま名づけた）【ぼくいくつ】をにらみました。

六十歳にも見えるし、八十歳にも見えるし、もしかすると百歳かもしれないし。

「ぼくいくつ」

またきかれたので、しかたなく常識的な線で、

「ななじゅうかのう」

とこたえました。

すると、【ぼくいくつ】が嘆くこと嘆くこと。

ぼくは反省し、印象よりもいくらか若くいうことにして、

「やっぱり、ろくじゅうかのう」

すると、【ぼくいくつ】が嘆くこと嘆くこと。

ぼくは反省し、印象よりもさらにさらに若くいうことにして、

「すまん、よんじゅうにしかみえん」

すると、【ぼくいくつ】が嘆くこと嘆くこと。

もう立ち直れないという感じで嘆きました。

ぼくは猛省し、印象なんか度外視して、自棄糞の気分です。

「いままではじょうだんじゃ。じっさい、はたちにしかみえん」

すると、【ぼくいくつ】が嘆くこと嘆くこと。

そうして悶絶（もんぜつ）して、そのまま死んでしまいました。

翌日、懐爺にこの話をすると、

「それは、死んじゃいますよ」

「なぜじゃ」

「おばけにとっては、年取って見えれば見えるほど、いわば勲章なわけですから」

「だば、なんといえ、よかったのかのう」

「まあ、ふつう三百歳、おまけして五百歳、大盤振る舞いで、八百歳でしょうかねえ」

「それは、わるいことしちまったのう」

「しかたありませんね。自分の歳をわざわざ聞いたおばけもわるい」

「だども、かわいそうなことしちまったのう」

「もう済んだことです。ところで、金ちゃん、わたしは幾つに見えますか」

懐爺が愛想笑いをするので、ぼくは大盤振る舞いをして、

「はっぴゃくさい」

と大声でこたえました。

「ひっ」

懐爺は悶絶して、そのまま死んでしまいました。

懐爺を生き返らせるために、ぼくがやった言語に絶する行為は、なにしろ言語に絶するわけですから、言語で語ることはできません。